

# 伝二条為氏筆順集切

西山秀人

伊井春樹氏『古筆切資料集成 卷五 私撰集・歌合・朗詠集』（平3 思文閣出版）には次掲の伝為氏筆歌集切一葉が翻刻されている。

きのふよりしくれにかゝるはなをうゑて  
のへやるへくもあらぬあきかな  
かへし  
君かためちとせのまつはなければや  
のへやるへくもあらすふくらん

同書によれば当断簡は手鑑『花月』所載のもので、『江州

浅見家所蔵品入札目録』（昭和三年九月二十四日）にも掲載されているという。

『花月』の調査を行なった杉谷寿郎先生の御高配により、当断簡の写真を借覧させていただくとともに、その書誌についても御教示を賜った。それに拠れば、当断簡は縦23・1センチ、横9・3センチ、右下に「為氏卿」の極札を付す。料紙は斐紙で、やや虫損があるらしい。歌一首二行書、一面五行詰。やや縦長の文字で書かれた比較的穏やかな書風で、為氏の真跡とは認められないものの、その書写年代は鎌倉期まで遡りうるかと思われる。なお、小松茂美氏『古筆学大成』には未収録である。

ところで、当断簡に記された贈答歌二首は、実は『順集』  
〔『私家集大成』順II 257・258〕<sup>(注1)</sup>に見えるものである。次に当  
該箇所の家集本文を西本願寺本<sup>(注1)</sup>によって示す。

おなし九月はつる日齋宮の、みやの御前に前栽う  
へて又よむ

たのもしなの、みやひとのうふるはなしくる、つきに  
あすはなるとも (256)

このうたの返事女房

あすよりはしくれにかかるはなをうゑてのへやるへ  
くもあらぬ秋かな (257)

かへし

きみかためことしのあきはなればやのへやるへく  
もあらすといふらん (258)

貞元元年<sup>(注2)</sup> (976) の九月末、齋宮 (規子内親王) 野宮に前  
栽を植えた折に詠まれた源順と齋宮の女房との贈答歌であ  
る。当断簡はその中の女房の返歌とそれに応酬した順歌の

部分に相当する。256「たのもしな」は『新古今集』(雑上・  
1576)・『六華集』(秋・877)・『歌枕名寄』(巻二・521)などの撰  
集類に入集するが、当断簡所載の257・258の二首は他集には  
見えない。したがって、当断簡はもともと完本であった『順  
集』より切り出された可能性が強いといえよう。  
次に断簡本文と『順集』各系統本の本文を併記し、その  
異同状況を探ってみたい。

\*略称

当断簡：切

『順集』

一 (1) 西本願寺本三十六人集

(2) 冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本<sup>(注3)</sup>

(3) 書陵部蔵「続小草内和歌」(501・49)

二 (1) 正保版本歌仙家集本

(2) 書陵部蔵「御所本三十六人集」(510・12、

雅平本系)<sup>(注4)</sup>

\*便宜上、句間を一字分あけて本文を示す。

…西

…坊

…続

…仙

…雅

257切

きのふより しくれにかゝる はなをうゑて

西 あすよりは しくれにかゝる はなをうゑて

坊 あすよりは しくれにかゝる 花をうへて

続 きのふより 時雨にかゝる 花をうへて

仙 あすよりは 時雨にかゝる 花をうへて

雅 明日よりは 時雨にかゝる 花をうへて

切 のへやるへくも あらぬあきかな

西 のへやるへくも あらぬ秋かな

坊 のへやるへくも あらぬあきかな

続 のへやるへくも あらぬ秋哉

仙 のへやるへくも あらぬ秋哉

雅 のへやるへくも あらぬあきかな

切 かへし

西 かへし

坊 返し

続 かへし

仙 かへし  
雅 返し

258切 君かため ちとせのまつは なければや

西 きみかため ことしのあきは なければや

坊 君かため やちよのあきは なければや

続 君かため 千とせの松は なければや

仙 君かため やちよの秋は なければや

雅 きみかため やちよのあきは なければや

切 のへやるへくも あらすふくらん

西 のへやるへくも あらすといふらん

坊 のへやるへくも あらすといふらん

続 のへやるへくも あらす吹らん

仙 のへやるへくも あらすといふらん

雅 野へやるへくも あらすてふらむ

傍線を付した257初句の「きのふより」、258二句の「ちとせのまつは」、同結句の「あらすふくらん」は全て続本との共

通異文であり、西・坊・仙・雅の各伝本とは対立的である。したがって表記の相違を別とすれば、当断簡の本文はすべて続本と合致していることが知られ、当断簡が続本と同系の『順集』から切り出されたものではないかという感を強くする。

ところで、『順集』の伝本は上掲のように二類五系に分類されるのが通説となっている。<sup>(注5)</sup>このうち続本は坊本と上巻の順序を逆にし、しかも巻末に物名歌三四首を増補するなど極めて特徴的な形態を有しているが、同系の他伝本の所在を聞かない。ちなみに坊本には定家自身の筆で「或本以之為下巻始」「或本以之為上巻始有其理歟」と加筆されているが、その「或本」の形態とはまさに続本に合致するものである。ゆえに、続本は定家が披見した「或本」の転写本と考えられてもいるが、上述した当断簡の本文性格を鑑みれば、今一本の同系伝本の存在が想定されてこよう。もつとも、現時点では僅か一葉を見出したに過ぎず、これ以上の論及はさし控えるべきだが、今後つれの断簡が出現すれば、続本との関係が徐々に明らかになってゆくものと思われる。

(注)

- 1 西本願寺本『順集』の本文は『西本願寺本三十六人家集』(昭46 墨水書房)の影印に拠る。
- 2 256番歌の「おなし九月はつる日」とはその前の255番歌の詞書「貞元□年初齋宮侍従のくりやに御坐するあひだ」(西本願寺本)云々の年時記載を受ける。「貞元□年」の箇所は坊・仙本では「貞元〓年」、続本では「貞元二年」、雅本では「貞觀元年」とある。『日本紀略』貞元元年九月条に「廿一日甲申。伊勢齋宮從<sub>二</sub>侍從廚<sub>一</sub>禊<sub>二</sub>東河<sub>一</sub>。入<sub>二</sub>野宮<sub>一</sub>。」とあることから、貞元元年が正しかろう。
- 3 『冷泉家時雨亭叢書第十六卷 平安私家集 三』(平7 朝日新聞社)の影印に拠る。
- 4 『御所本三十六人集』(昭46 新典社)の影印に拠る。
- 5 『私家集大成』中古Iの順解題では一類を歌仙家集本系、二類を西本願寺本系とする。これら両系のいずれを原態とみるかについては諸家によつて論が分かれ、今なお定説を得ない。稿者は旧稿『源順集』小考(『語文』81輯平3・12)でも述べたように西本系原態説を支持するが、その具体的検討については他日を期したい。本稿ではひとまず『和歌大辞典』(昭61 明治書院)「順集」解説に

従い、西本系を一類、仙本系を二類として扱った。なお、一類(2)系の本文は従来書陵部蔵501・143本に依拠していたが、その親本たる冷泉家時雨亭文庫蔵坊門局筆本の存在が明らかになったことで、今後はこちらを同系の代表伝本として位置づけたい。また、これまで公に論じられることはなかったが、前田家育徳会尊経閣文庫襲蔵の『源順集』一冊(13ノ56)も坊門局筆本系の写本である。江戸期の書写とみられるこの伝本は、書陵部本に比べて坊門局筆本の本文を忠実に継承している箇所も存するが、前者のように一種の「複製本」を製作しようという意図は幾分弱まっている。

〔付記〕 本稿は平成八年度上田女子短期大学研究助成費にもとづく研究成果の一部である。種々御教示賜りました  
日本大学教授・杉谷寿郎先生に御礼申し上げます。